

在外研修報告

1982年10月3日から11月29日まで、「方格地割の歴史的展開に関する研究」ということで、イタリア、チュニジア、フランスの農地および農村近郊都市などを訪れた。

まずイタリアでは、ポローニャを中心とするエミリア街道沿いのエミリア・ローマナ地方とパードバ付近に広がるベネト平野のケントゥリア地割遺構を、それぞれ調査した。ケントゥリアとは、古代ローマ人が、B. C. 2～1世紀に、その植民地に経営した、一辺約710mの農地区画である。区画の四周は、通常、スコロ（灌漑用水路）やカナーレ（運河）を伴う道路で構成されるが、これらを伴わない場合は並木路となっている。区画の内部は、縦横10等分されるのが本来の姿であるが、現状は幅1m程のスコロや軽四輪（もとは荷馬車）の通れる程度の道で4～5分割されていることが多く、幅約30m毎の一筆ずつは、幅約20cmの素掘り溝で区切られている。地目は畑地で、栽培種目はブドウ、トウモロコシ、オリーブ、小麦を主とする。

現地調査、地形図、参考文献からの研究成果をいえば、ポローニャを中心として、その東西約102kmの間に限ってみても、1) 正方形、またはそれに近いもの（直角に交わる2辺の長さの差が、40m未満のもの）約270区画。2) 長方形（差が40m以上）、台形ならびに菱形を呈するもの、約480区画。3) 区画をなさないが、ケントゥリア地割の延長とみなし得る道路または水路が約450であり、農地の持久力は驚異的といえよう。また、ベネト平野については、ドーロとノアーレの地形図を、座標測定装置にかけて、それぞれの区画の交点を読みとり、区画の一辺の長さを算出した。1) ドーロE—W86交点, min. 694.1～max.735.1, mean 711.4, N—S 80交点 687.6～747.3, mean 714.2。2) ノアーレE—W77交点, 684.7～738.8, mean 711.1 N—S 70交点, 684.7～742.8, mean 720.6であった。東西長はいずれも標準値とされる710.4mに近いが、それに比して、南北が長く、とくにノアーレにおいて著しい。エミリア街道付近の変形区画といい、この結果といい、原因が地勢的条件によるのか、また施工技術に帰するのかは、今後の究明課題である。なお、高速道路の発達は、その周辺部に工場進出をもたらし、遺構の破壊が著しい。また、ルビコン川近くのサン・ラツァロにおいて、圃場整備と栽培種の改良がなされ、収穫量の増加をみたことが報告されている。

チュニジアでは、首都チュニスの北郊カルタゴ遺跡の西方に、20区画余りのケントゥリア遺構があり、耕地形態や栽培種目などイタリアと大同小異である。ここで興味深いのは、アントニヌスの浴場を中心とする、カルタゴ・ローマナ遺跡（A. D. 1世紀）の建物配置が、地割計画に基づいており、全体の東西距離が、遺跡地図による図上測定であるが、1,775 mあり、あたかもケントゥリア区画の2.5倍を示していることであった。

フランスでは、風雨のため、アルルの現地調査は断念したが、パリ国立図書館において、97葉におよぶ、プロヴァンス地方の古地図台本と一部その原本を閲覧する機会を得て、17世紀代における当該地方の地割と水路の様相を知ることが出来た。

（岩本次郎）